

2024-評価会 07
令和 6 年 7 月 4 日
蒸気噴出に関する環境影響評価委員会

三井石油開発（株） 殿

蒸気噴出に関する環境影響評価委員会
委員長 佐藤 努

融雪後の水質モニタリング頻度について
(答申)

2024 年 7 月 2 日付けで諮問があった「融雪後の水質モニタリング頻度」について、
下記について検討すること。なお、それぞれの検討事項の詳細は、別紙を参照する
こと。

検討事項 1. 融雪期終了の根拠を明確にすること

検討事項 2. 河川中の砒素の総負荷量が減少傾向であることを確認すること

以 上

別紙：委員の意見

【意見1】 五十嵐委員

1. 融雪期が終了したという判断がどのような理由でなされたかを説明する必要がある。流域から積雪がなくなるだけでなく、時間遅れで流出する分もある。したがって、その根拠を示した方がよい。例えば、河川水位から判断して、基底流出量に接近した、あるいは降雨の影響が河川水位の変動に大きく寄与するようになった、などがある。

2. 水質が基準値を下回るというのは、一つの指標であるが、総負荷量として減少傾向になることも重要である。すなわち濃度 C ×流量 Q の値が、着実に減少傾向にあるということを示すことも重要である。このような観点で、整理すること。

上記を含めて月1回調査の根拠の妥当性を説明する必要がある。

【意見2】 佐藤委員長

諮問にある説明では「月1回調査の根拠の妥当性を説明」したことになっていないように感じる。融雪期は流量が多いために濃度が低く抑えられているのではないかとの指摘に反論する根拠を持っておく必要がある。その根拠の一つとして、五十嵐委員が指摘したような方法も有効と考えられる。実際、ニセコアンベツ2号川の5月の流量が7倍以上あるが、砒素濃度が検出されているところがある。

なお、丹念に融雪期の水質モニタリングを行ったことから、融雪時の異常濃度が無かった事は確認された。

【意見3】 岩崎委員

融雪時の異常濃度が無かったことは、確認できていると考えられる。

一方で、五十嵐委員が指摘する総負荷量で考えると、流量が減ってきて、濃度が上昇してくる可能性も確かに留意する必要があるため、負荷量での検討をしたほうが良い。

なお、分析結果の表現に関して、環境基準未満という表現だけでなく、例えば、測定値の多くは検出されず、検出された場合でも環境基準の1/5～1/10であった、などのといった具体的なマージンがイメージできる記述もあったほうが読み手には親切かもしれない、との指摘があったので、今後の資料作成においてご参考にされたい。

【意見4】 吉田委員

「ヒ素が検出されている」について、事故前の平常時の砒素の濃度が分からないため、何とも言えないが、少なくとも、融雪期が過ぎて、濃度が上がらない事の確認が必要と思う。流量×濃度で推定される、その地点での河川の総砒素通過量が減り続けることが最も大事な事かと思う。

以上